

414
A 4722



松岡

大正十一年四月
隈侯爵邸寄贈

肥後人高瀬新十郎曾テ藏田實充ニ頼
リ邸内ノ情狀ヲ具ニ探リ得候云々ノ件
先般粗開申仕置候處其後ノ探偵左ノ
如シ

高瀬ハ嘗テ深ク大田黒惟信ヲ信シ居副島氏
ニ寄食シ同氏ノ密語等モ徃々惟信ニ漏シ候事
有リ因テ其後ノ探索ヲ惟信ニ依頼致シ置候
處同氏屢高瀬ニ面晤シ他ニ託シテ遠ク其實

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7

ヲ探リ吳候哉ノ處毎ニ曖昧ノ返辭ヲ為シ
言其事ニ及ハハ談ヲ他事ニ遷シ免角其實ヲ
包藏候哉ニモ被相考未夕確乎ノ證據ヲ得サ
ル由シ其後高瀬ハ何故カハ知サレハ游涉ノ為メ
ト称シ同縣士山田謙外一名ヲ携ヘ日光ヨリ會
津新瀉邊へ出行當今不在ノ由ニ候

大田黒云ク高瀬ハ性狡且ツ多言ニメ談次喋々
其探訪ニカリ盡ス至ラサル所口無キナト、誇言
シ而テ其實ハ問ハ却テ得ル所無ク極テ事
曠言スルノ癖アルハ藏田云レノ件モ已レ其探訪
ニ手廣キヲ示シ為メ或ハ一時ノ誇言ニ出候哉モ
計リカタシ然レ藏田實父松井典禮及ヒ兄柏
原某ト高瀬ハ舊ト無ニ、交誼アルモノニ付實
亮ニ於テモ亦從來ノ懇親ナルハ曾テ承知セリ
唯高瀬カ為メニ密意ヲ通スルト通セサルト至
テハ未夕確知ス可ラサル也ト云ヘリ故ニ不日高

瀬カ歸京スルヲ待テ猶確實ヲ得候ハ、速ニ
開陳可仕候

右ノ件ハ先頃密カニ聞込候處其儘打捨カタ
ク粗具陳ニ及ヒ置候末ニ付御疑念モ可有之
ト存シ今重テ其後ノ情况ヲ爰ニ上申候也猶
聞ク頃來何者トモ知レス容易ナラサル書ヲ作り
活字ニ起シテ之ヲ諸貴頭ノ邸ニ郵送セシ者アリ
ト此事早ニ御承知ノ丁ナルヘシ其筋ニ在テ

モ厚ク探偵ヲ盡サル、由然凡事極テ秘シ
候事ト相見ヘ毫モ其手掛ヲ得ス候處竟
ニ警吏款貞ト申スモノ、探索ニ依リ稍其
証狀ヲ認候哉ニ付不日奸徒ノ所在モ相
分リ可申候抑モ今ノ當路諸君ハ嘗テ此
等ノ件ニ習レ以テ常事ト為シ毫モ戒心
セサルモノ、如シ故ニ或ハ其害ニ罹ルコアリ
嚮ニ大久保公凶變ノ前一片ノ激書ヲ投

寄^セ不^レ^レ者アリ公ハ之ヲ以テ奸徒ノ虚唱ニ
出シモノト笑ハレリ右ノ件モ亦決テ虚唱ナリ
ト概思ス可カラス僕一日公ヲ害セシ狂豎ノ墓
下ヲ過ルニ来テ墳前ニ吊スル者衆ク香烟縷々
絶ヘサルヲ見ル是レ悉ク狂豎ノ親姻知己ニ非サ
ルナリ彼ト其志情ヲ同スル者其死ヲ相憫レシ
来テ之ヲ吊スルニ因ル蓋シ輦轂ノ下四方輻輳
奸兇ノ徒ノ多キ亦以テ徴スルニ足ル現ニ諸省

中ニ奉職スル者ト虽氏心竊カニ其變アルヲ希
フモノ多シ其レ上ニ在ル者ハ塵々數公ニシテ下ニ
在ルノ奸兇限り無シ其害能ク何ノ日ニ止ン乎
朝ニ其人ニ媚ヒ夕ニ之ヲ他所ニ詐議スル如キハ
庸人ノ常情ナリ僕カ言過慮ニ似リト虽氏聊
カ思フ所アルニ因ル固ヨリ閣下ノ取捨ニ任スノ
ミ顧クハ眷々御注意アラシコトヲ祈ル序ニ言フ
先頃供奉中ニ関申セシ件ニ関係シテ或公ヨ

リ或方へ寄スル^密向議ノ直書尺翰ヲ盜取シ所
持候者之レアリ其人現今他行中ニ付其内借
得可供御覽亦其一證ト為^ス足レリ實ハ其節
名古屋迄推參ノ會ニ候処途上俄カニ疾ヲ發
シ且ツ路費ニ困シ候ヨリ本意ナク歸途ニ就キ
候訊ニ有之候ナリ

八月廿二日

熊本縣士族當時副島種臣君之寄食
人高瀬新十郎内話之件并ニ新十郎履

歴如左

新十郎為人倭衣能ク人ニ媚ヒ性亦頗ル狡黠
人ノ意ヲ得ル極テ上手也初メ薩ニ入り桐野利
秋ニ取り入り桐野モ亦大ニ之ヲ器トシ食客ト
シテ養ヒ置ク凡ク一年半後暴卒之時桐野
之命ヲ受ケ熊本ニ歸ル其父善共衛及ヒ兄
弟親戚一家舉テ賊ニ黨シ平定後善共衛ハ
懲役五年後ニ死ス兄弟親戚亦悉ク刑ヲ

受ク新十郎ハ中間俄カニ盟ニ背キ宇土郡
安高村山中ニ潜伏賊情ヲ熊本ニ報ス之レカ
多ノ平定後賞賜アリ然レモ兄弟親戚之間
協和セス一昨年中出京頻リニ官途ヲ希望
セリ遂ニ其志ヲ得ス權少警視江口高確高
山一祥輩ニ頼リ警視之探偵ニ當今被雇候
者且ツ薩ニ在リシ事ハ自ラ極メテ秘シ居レリ

以上ハ新十郎大田黒惟信ヘノ内話ヲ記ス
蓋シ初メ警視ノ探偵ニ被雇候砌大田
黒ヨリ江口ヘ依頼ニ因テ成レリ故ニ惟信

ニハ時アリ密事ヲ洩スコトアリト云

新十郎ハ副島君ト毫モ従来ノ縁故ナク嘗テ
一面識モナシ然ルニ警視ニ於テ同君ト土人板
桓氏等ノ偽民権黨トノ聲息通否如何ニテ
探り得ル為メ之ヲ同君ノ寄食人ト為セリ故ニ
同君一家ノ情况一一之ヲ警視ニ報スト云同君
ハ毫モ之ヲ悟ラサルノミナラス極メテ之ヲ親
信セリ初メ副島君ニ謁スル片ハ神道ノ大意
ヲ傳受シ其候様懇願ニ日々通學之末終
ニ君ノ心ニ悔ヒ昨年九月比ヨリ君ノ郎ニ入り

以上大田君ニ洩スノ語

今日迄寄食セリ然ルニ他所ニ在テ同君ヲ
罵四言蔑視ニ君ノ平素ノ行跡ヲ誹議スル故
拳ニ違アラス而テ君之ヲ信シ已レニ媚ル者ヲ悦
ニ似タリ君之迂闊亦甚シ然レモ是レ新十郎
所ニ倭者ナル所ナルカ

新十郎云副島君ハ後藤象二郎氏トハ極メテ交
際シ厚クセリ過日モ君ヨリ一書ヲ後藤氏ニ託シ
板垣退助ニ贈ラタリ書中ノ旨意ハ素ヨリ窺
ヒ知ラサレモ新十郎ノ意ヲニ今般宮内出仕ニ被
補其申訳ヲ如此繕ヒ大封ニ認メタルカト考ヘリ

云々

以上直話ヲ聞ク

六月廿四日高瀬来話ニ云明治十一年片岡漁吉
等西京行在所へ差出シタル建言書活字本一冊
ヲ出シ●此一冊ハ其砌り板垣氏ヨリ副島君ニ贈
ル所ノ書冊ナリ君ヨリ借受スルモノト云

・ 曰

新十郎云大藏卿ト副島君トノ交際ハ外親睦ニ
似テ内実ニ議論相及君時々惡聲ヲ發スル
コアリト云莊村問テ云フ惡聲トハ如何ニ新十

云フ惡聲ハ一ト言ヒ難シ同君ヲ政府頻リニ
再勤セシメント迫ルアルモ大隈中間ニ之ヲ拒絶
スル也ト内話セラレシコトヲト云君不平之餘新十
輩ニ語ラレタルハ殊拙劣ナリ云々新十自ラ話ス
以上新十ト莊村トノ話ヲ記ス兩人時々

往來セルヲ以テ如此候モ往々聞クアリ

新十郎莊村ニ依頼シテ云フ一度大藏卿ニ面謁
セシヲ希望ス因テ其周旋ヲ託ス莊村答ハ其卿氏ハ
絶テ親ミラ蒙ラサルナリト云テ此事ヲ辞ス新
十郎又云フ誰カ別人ヲ以テ謁見ヲ通スヘシ併シ

其第ハ玄関ヘノ名刺ハ偽名ヲ以テ差出シ度
ト云フ莊村云フ人ニ謁スルニ何ヲ偽稱シ以テスル
アラシ殊ニ副島大隈ニ公ハ同縣人使令スルモノモ亦
同縣士多シ後日ノ為メ甚タ不可ナリト云新十
云ク僕當今副島ニ寄食スルヲ以テ主家ノ耳ニ
響クハ彼此差支ルノ事情ナキ能ハスト云ヘリ
後兩三日ヲ経テ再ヒ逢フ此日又云フ大藏卿ニ面
謁ノ事ハ本名ヲ以テ差支ナシ其故ハ既ニ副島
君ニモ内情ヲ夫ニ承諾致サレタリト云フ莊村
又答ヘテ云既ニ内情承諾ナラハ同君ヨリ申込

三候方速カナラント終ニ之ヲ固辭セリ

以上荏村之話ヲ記ス

過日新十郎大田黒ヲ訪ヒ内語之末ニ云ク當
今探偵ニ盡カスルト雖氏素ヨリ一人ノ力ニ辨セス
故ニ三四名ノ知己ヲ擇ミ三四円ヨリ五六円ノ勞
費料ヲ與ヘ貴紳ノ内情ヲ偵知セリ此節大隈
氏ニ食客ニ入レ置キ候松井典禮ノ子某モ手先
ニ使用セル者ナリ故ニ大隈一家ノ事ハ瑣末ノ事
モ影郷音相知ルヲ得ル云ト云ヘリ

以上大田黒ノ話ヲ記ス

右之話ヲ聞シ以來頗ル探訪ニ盡カセ^ル松井典禮
ト云ハ熊本舊家老松井佐渡ノ分家ニテ若干^ノ祿
ヲ領シ君側用人ヲ務メ頗ル君寵ヲ得タル者^{其子トシテ}江
戸在勤之日藝妓ト通シ其暇ニ乃子ニタル子也因
テ之ヲ江戸定府卒族藏田某ニ遣シ其養子トナ
ル維新後歸縣杉本險事彼地在留之日之ヲ携
ヘ竟ニ同氏ノ周旋ニ依テ大隈公之侍者ト為レリ此
者ノ兄^少栢原氏ニ養ハレ當今熊本ニ在リ之ト
新十郎^モ殊ニ親密ノ知友ナリト云新十郎ガ既ニ
手先ニ使用セリト云ハ即チ藏田元實ノ丁ナラシカ

後新十再新十大田黒ヲ訪フ是与判キ大田黒ニ依頼シ
テ新十談話ノ真ヲ探ラント欲ス故ニ大田黒ヲ
以テ之ヲ問フ新十云ク松井典礼ノ子ハ即チ藏田
實元未タ十八九歳ナリ当時杉本周旋ニテ大隈
公ヘ寄食セルモノニ是ニ於テ海彼レ愈々
藏田ヲ使用シ又金貨致ハクヲ典へ置キ候哉其
確証ヲ得ン為メ百方探リ候其後共新十絶テ口外
致サス何レ確實ヲ得次才申上ヘク候因テ考フルニ
新十初メ大田黒ニ對シ從容トシテ手先ニ入レ置ク
ト云ヒレハ一時失言ニテ後日杉本ノ周旋ナリト云ヒレ

真ヲ語リシモノカ其後頻リニ探リリ候テハ絶
テ口外致サルハ自カラ失言ヲ悔ヒタルヤ未タ知
ルヘカラス何レ數日ノ後確証ヲ認メ言上仕候也
先年或ル公カ或ル勤王家ノ子ヲ帳三侍者トシテ
使令セリ後或公議内話時其侍者カ外ニ渡シ之レカ為メ
其公大ニ困難セラレド等之レアリ故ニ應御
會置ノ為メ聞得レマヲ一覽ニ呈シ候然レモ未タ確
然タルモノモハ無之候也

七月十日

松岡守信

大
差